

# 校名：奈良教育大学附属中学校

所在地：〒630-8113 奈良市法蓮町2058-2

電話番号：0742-26-1410

記載日：平成28年 5月 14日

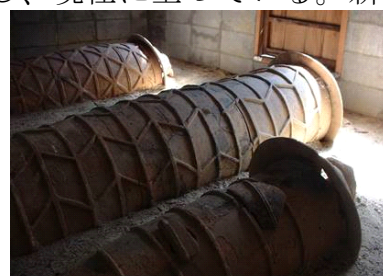
記載者：谷口尚之

記載者役職：副校長

## 本校の校風、おおまかな特色について：

本校は1947(昭和22)年4月1日、奈良師範学校附属中学校として創設され、同年5月1日に開校式を行い、来年2017(平成29)年には創立70周年を迎える。戦後日本の歩みとともに、生徒と保護者、教員が一緒になって激動の時代を乗り越えてきた。

1959(昭和34)年に奈良盆地を一望する佐保田の丘に校舎を移し、現在に至っている。新校舎の造成中、裏山(那羅山3号墳)から円筒棺3基が発見された(右写真は出土地に復元展示されている様子)他、プール工事中には鳥形埴輪(橿原考古学研究所附属博物館蔵)も発見されるなど、「古墳のある学校」としても知られる。



1968(昭和43)年、「教育目標」を改定し(下掲)、目指す生徒像として、真理の科学的な探究を重んじ、平和を願い、いのちを大切に作る人間を掲げ、自由な校風と自主・自立・自治の精神とともに本校の旗印となっている。

- 真理を求め、平和を願い、しあわせな世の中を築く人間に
- 科学と技術の基本を身につけ、すすんでものの本質をきわめる人間に
- 自由と責任を重んじ、粘り強く現実を切り開く人間に
- みんなのいのちや願いを大切にし、あい励まし合い助け合う人間に
- 豊かなこころと、たくましいからだをもち、明るく健やかに生きる人間に

生徒一人一人が学校の主人公であることを大切に、日々の授業実践はもとより、生徒と教員が一緒に創りあげる様々な学校行事を通して、深く確かな学力を培うことを命題としている。2006(平成18)年度から全国に先駆ける形でESD(持続可能な開発のための教育)に取り組み(後述)、2008(平成20)年度にはユネスコスクールに加盟し、2014(平成26)年に岡山大学で開催されたユネスコスクール世界大会ではESD優良実践事例集にも掲載され、生徒による実践報告も行っている。

校章は、「いにしへの奈良の都の八重桜 けふ九重に にほひぬるかな」(伊勢大輔)と古歌に詠まれ、奈良県や奈良市の花ともなっている、「ナラノヤエザクラ」(右写真は今年5月初旬、本校玄関前に開花した様子)をモチーフにデザインされたものである。



## 本校卒業生の活躍状況について：

2016(平成28)年3月現在で卒業生総数11,377名を数え、奈良県内はもとより、国

内外の各界で活躍する有為な人材を輩出してきた。

国政の場で活躍されている方、経済界で指導的な役割を果たされている方、洋画家で著名な文化功労者の方、奈良はもとより日本各地の小中学校や高校、大学などの高等教育機関で教鞭を取っている方、IAEA で原子力の平和利用のために貢献している方など、多方面で多岐にわたる活躍をしておられる。

卒業生の動向については、同窓会が10年ほど前に卒業生名簿を改訂され、そのなかで把握できているところもあるが、個人情報保護の観点から以後の名簿作成は困難との判断をされている。したがって高等学校卒業以降の動向は、学級担任や学年教員と個々の卒業生とのつながりあるいは、卒業生どうしの結びつき（FB などによる情報共有等）に頼るのみとなってきた。またキャリア教育の一環として、PTA主催で本校版の「ようこそ先輩」を行い、比較的若い世代の卒業生数人に来校してもらって、本校での学びがその後の職業選択や自分の生き方にどのような影響を与えたのかを在校生に語ってもらう取り組みを行っている。



また、法人化後に卒業生やその保護者、退職教員等によって組織された教育後援会も、各界で活躍されている卒業生の方を招いての講演会を開催している。さらに、著名な卒業生の方々には、法人化後に組織された教育後援会の名誉顧問や役員をお引き受けいただき、母校を応援していただいている。

### 本校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

本校での勤務を経て県の公立学校等に戻られた方について特段の追跡調査を行ってはいないが、大方の先生方の動向は把握できている。

比較的多いのは、本校での勤務を経て一旦公立学校に戻り、その後、県教育委員会で指導主事を務めた後に公立学校の教頭や校長などの職に就かれる方（現在の県中学校校長会の会長も本校の勤務経験者）である。ほかには公立学校を経て大学教員や専門分野の研究者になられる方、あるいは本校を辞して直接国立や私学の大学の教員等になられた方などがおられる。

県教委との人事交流協定が正式に結ばれてから幾度かの改訂もあり、時期によって交流が円滑に進む場合とそうではない場合があったようにも思われるが、今後、互いの教員の資質向上に寄与する人事交流をさらに進めていきたいと考えている。

### 魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

本校では前掲の5つの教育目標に収斂する教育研究を重ねてきたが、平成18年度から「ESDの理念にもとづく学校づくり」、平成23年度からは「未来を創る子ども」を育むESD」を主題とした教育研究活動に取り組み、毎年その成果を公開研究会や研究紀要の形で発信してきた。私たちが始めた当時、教員の間でもほとんど認知されていなかったESDであったが、本校は学校カリキュラムや学校環境などを包括したホールスクールアプローチの手法で全国の動きに先駆けてこれに取り組んできた。そして教科間あるいは教科外活動相互のつながりを意識した実践につなぐため、先達の小学校に学んで「ESDカレンダー

一」を作成した。

本校のESDは、すべての教科教育や教科外活動で、ESDで大切にしている価値観（人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等）を土台として、「体系的な思考力」「代替的（批判的）な思考力」「情報の分析力や活用力」「コミュニケーション力」などを培うことを目指してきた。本稿では『人権平和学習』『国際理解学習』『世界遺産学習』について紹介する。

### ①『人権平和学習』～「平和のつどい」の取り組み～

1986年、「核廃絶を訴えるヒロシマ・ナガサキアピール」を機に、当時の生徒会の提案から始まった「平和のつどい」は30年近い歴史を重ねる。この間、ヒロシマ・ナガサキへの原爆投下をめぐる問題、沖縄戦や基地問題、戦時下の奈良について、アウシュビッツやアンネ・フランク、杉原千畝さらに児童労働や地雷の問題など、その時どきの時代の風を感じながら生徒主体に取り組んできた実践である。昨年度は、事前学習として学年縦割りで昨年度の「平和宣言」について振り返るとともに、マララ・ユサフザイさんのスピーチや石井光太さんの『ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか』など教材にして「教育を妨げるものは何か」について学び、さらにバングラデシュに教育を届けるべく学校建設に尽力されているNPOの方をお招きし、小さな一歩であっても、まず自分にできる何かを始めることの大切さを教えていただいた。



### ②『国際理解学習』～韓国公州大学校附設中学校との交流～

「異なる言語や思考様式、価値観を持つ相手の立場や考えを受容し、響感しながら、自己の考えを伝え、対話を通して新たな考えや価値を生み出すというESDの学びを追求する」ことをねらいの一つとして、2011年に韓国の公州大学校附設中学校との交流協定を締結し、翌年から生徒および教員の相互訪問を含む交流活動を進めている。交流では相互の学校での歓迎行事の他、公州では昨年世界遺産登録された武寧王陵の見学、奈良では東大寺の見学、さらにホームステイなどを通して、互いの文化に触れあう貴重な時間を共有している。



### ③『世界遺産学習』～「奈良めぐり」の実践から～

本校では開校以来ほぼ継続して、奈良市内およびその周辺の文化財についての学習を進めてきており、現在では下表のように3年間で計5回、「奈良めぐり」と称する現地見学を核とした世界遺産学習をおこなっている。また第2，3学年では秋の社会見学において、それぞれ京都の洛西および東山にある世界遺産サイトを班単位で巡る形で”本物に触れる”取り組みをおこなっている。

	1学期(4月後半)の見学先	3学期(2月半ば)の見学先
第1学年	平城宮跡・同資料館、佐紀盾列古墳群など	東大寺…講堂跡、南大門、大仏殿、三月堂、二月堂、戒壇堂、正倉院など
第2学年	法隆寺・中宮寺・法輪寺、藤ノ木古墳および斑鳩文化財センター	興福寺…五重塔・東金堂・国宝館など 奈良町、元興寺、国立奈良博物館
第3学年	薬師寺・唐招提寺など西の京の寺院 (大和郡山城・垂仁陵古墳・西大寺など)	



## 地域において、現在、どのような存在であると考えますか：

本校は毎秋、教育研究会を開催し、教育研究の成果を世に問い、地域に発信してきた。研究会には、大学法人とともに県教育委員会や市教育委員会からも指導助言者を派遣願うとともに、県内公立学校の先生方の参加をいただいている。

本校が地域の教育ニーズを受け止め、モデル校としての認知をいただけているか否かの評価は他に譲るが、昨年、奈良市教育委員の皆様が視察に来られた際も、本校の教育内容や生徒の学ぶ姿勢などを高く評価していただくことができた。

また市教委主催の10年研修の講師に本校教員が招聘されたり、市内の児童生徒向けのロボット講習会で本校の科学部生徒・顧問が指導者として求められたり、県国際課主催の次世代養成事業（国際交流）に副校長が役割を担ったりするなど、様々な形での地域貢献を行っている。



## 附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

本校では学校案内のリーフレット等に以下の3つのミッションを掲げている。

- ①教育の今日的な課題を見据え、実証的で、先導的な教育研究を推進する。
- ②教育大学に学ぶ学部生や大学院生が、実践的な指導力を培うための場を提供する。
- ③奈良県をはじめとする地域の教育に貢献する。

この3点は、おそらく全ての教員養成系大学附属校園の任務と考えて差し支えないであろうし、いずれの学校園も懈怠無く、これらを踏まえた教育実践を進めていることだと思うし、本校もまたしかりである。

また先述のとおり、本校はユネスコスクール（正式には Unesco Associated Schools Project Network = ASPnet）の一員として活動してきたが、私たちが2008年に加盟を認可された際に手にした認可書(英文)には以下の言葉が書かれていた(拙訳)。

「ASPネットに加わることは、教育の人道的、文化的そして国際的な次元を補強することによって、教育の質を向上させるパイロットプロジェクトを遂行するという、重要な決定と誓約をすることです。ASPネットの学校は「諸改革の中核」としてまた、それぞれの地域における、ユネスコの理念のための「灯台」として努めるものと見なされます。」

本校は日本国憲法に示された「国民主権」「平和主義」「基本的人権の尊重」という三原則を日々の教育実践の基盤とし、ユネスコの理念を具現化するための地域の『灯台』となるとともに、ESDのいう『自然との共生や多様な立場を尊重できる、公平で公正な価値観を持ち、問題解決能力に富んだ、より良い社会づくりに参画する人』づくりを目指していきたいと考える。それは、「グローバルな視点に立って地域で活動」する、「次代の主権者」を育てることであり、本校が拠って立つ意義であろうと考える。